

# 道 -ROAD-

大阪学芸中等教育学校  
校長室だより

## 心に「遊び」を

今年は桜の開花が例年より早く、北館中庭の桜の木々も芽吹いてきています。本格的な春の到来が待ち遠しい季節となりました。早いもので本日3学期の終業式を迎えました。同時に1年の締めくくりの日であり、令和2年度のそれぞれの学年のカリキュラムが修了したという日でもあります。

この1年を振り返ると、新型コロナウイルスの影響で、世界中が大きく揺れた大変な1年でした。当たり前と思っていた日常が、どれだけ有難いことかと感じた人も多かったのではないのでしょうか。長期の学校休業の中で、新年度の始まりはオンライン授業でした。学校行事は、何とか体育祭は開催できましたが、文化祭や3年生のオーストラリア研修旅行、5年生のヨーロッパ修学旅行等は中止となりました。

まだまだ心配の種は尽きませんが、この1年、朝の検温、マスクの着用、うがいの励行、手洗いの徹底などを心掛け、また学校では、教室の換気や消毒、静かに昼食を食べるなど、感染防止の取り組みを継続したおかげで、本日元気に終業式を迎えることができました。皆さん一人一人の心がけと努力の賜物です。ありがとうございます。4月以降も引き続きよろしく願います。

ところで、皆さんは一般の車のハンドルには“遊び”があることを知っていますか。車のハンドルは、少し操作しただけではすぐにはタイヤの角度が変わらなくなっていきます。これがハンドルの“遊び”です。それは、“遊び”がないと危険であったり、快適な運転が難しかったりするためです。

“遊び”がないと少しハンドルを切っただけでタイヤが動いてしまい、非常に運転しにくく危険です。また、一般道を走行するときは道路のでこぼこでタイヤが動き、その振動がハンドルに伝わりいつも震えてしまうので、“遊び”が必要なのです。

先日、コロナ禍の中での若者の実態調査という記事を見ました。その結果は、この1年で「時間の余裕」はできるも、「心の余裕」はできていないということです。

また、変化が激しく、科学や技術の進歩が速い複雑な現代社会の中、多様な人々と仕事をして、人生を乗り切っていくには、物事をいつも四角四面にとらえて、こうでなければならないとばかり考えていたのでは、心の動きもギスギスしてしまいます。

**車のハンドルに“遊び”が必要なように、心にも“遊び”という余裕が必要**ではないでしょうか。一度、自分の生活を振り返ってみてください。

4月からは令和3年度、2021年度がスタートします。竹に節があるように、人生の節目がしっかりしているほど、大きく成長するといわれています。皆さんも学年が変わるという節目をしっかり過ごして欲しいと思います。

3月2日(火)にできる限りの感染症対策をとり、第20回卒業式を挙行了しました。厳粛な雰囲気の中で、6年間の思い出を胸に20期生74名が「友愛の学び舎」を巣立っていきました。

以下に、「式辞」を掲載(一部省略)しましたので、ぜひお読みください。

今日の卒業式は、人生の一つの大きな節目であり、新しいスタートラインに立つ、記念すべき日です。今日の輝かしい門出に際し、心に留めておいて欲しいことを2つ話します。

まず第一に「人に優しく、思いやる気持ちを大切にしたい」ということです。

想像を絶する甚大な被害をもたらした東日本大震災からまもなく10年になります。2011年3月11日に地震が発生。巨大津波と福島第一原発事故という複合災害により、暮らしと営みが奪われました。皆さんが4年生の春休みに福島へのRYSスタディツアーを企画しました。多くの人に参加し、実際に目で見て、現地の人の話を聞き、たくさんの事を肌で感じたことと思います。

震災後、復興支援の合言葉となったのは「絆」という言葉です。「絆」に呼応するように、助け合いの意識が高まり、多くのボランティアが被災地に駆けつけました。優しい心、思いやりの心を持ち行動に移した人たちです。現在、新型コロナウイルスが流行している状況の中、毎日のように「密」という言葉を耳にしています。「三密を避ける」というのは物理的に離れるということですが、「密」には親しむという意味が含まれています。このようなコロナ禍でも、心はしっかりしたつながりを持つことが大切ではないでしょうか。

一方、時代はあらゆる分野で急激な進歩・発展を成し遂げ、社会も大きな転換期を迎えています。人工知能AIの進化や車の自動運転など新しい技術開発がどんどん進んでいます。また、コロナ禍を機にリモートワークが増え、仕事の在り方が見直されています。文明が高度になり、情報があふれる社会では、いっそう「不易」の部分の大切になってきます。それは、豊かな人間性、他人を思いやる心、人権を尊重する心、自然を愛する心など、時代が変わっても大切にしなければならないものです。

まず自分を大切にしてください。そして、他人に対し思いやりの心を持ち行動できる人になって欲しいと思います。

二つ目は「何事にも積極的にチャレンジし主体的に学び続けて欲しい」ということです。

昨年はコロナ禍の中、暗いニュースばかりでしたが、そんな中で希望の持てた話をしたいと思います。それは、日本が世界に誇れる小惑星探査機「はやぶさ2」の躍進です。

6年前の2014年12月、「はやぶさ2」が、およそ3億キロ離れた小惑星「リュウグウ」を目指して地球を飛び立ちました。ちょうど皆さんが本校入学前の小学校6年生の時に打ち上げられました。地球の直径が1万2700キロなのに対して、「リュウグウ」の直径は何と870mという本当に小さな惑星です。「リュウグウ」への到達は、日本からブラジルにある6cmの的を狙う精度が求められるそうです。

その「はやぶさ2」のカプセルが昨年の12月6日、距離にして52億キロ、6年間の旅を経て地球に帰ってきました。皆さんが、本校で学校生活を送っている間、ずっと宇宙を旅していたこととなります。「はやぶさ2」の本体は、地球には帰還せずに、また宇宙へ、今度は100億キロ先の小惑星を目指し飛び続け、11年後、2031年にまた地球にもどってきます。

カプセルは科学的に貴重なサンプルが含まれていると期待されていることから、JAXA（宇宙開発研究開発機構）の方々は「竜宮の玉手箱」と表現されました。その後、中身が開けられました。目標の50倍の砂や石が入っており、物質の成分がこのミッションの最大の鍵を握っています。つまり、太陽系の成り立ちや生命の起源に迫れるかもしれないという壮大なロマンが込められているのです。現在その物質の分析も始まっています。今後の「はやぶさ2」の偉大な成果に注目して欲しいと思います。

初代「はやぶさ」は2003年に打ち上げられ、小惑星「イトカワ」を探査して7年かけて地球に戻ってきました。この旅は波乱万丈でした。その間、8回以上の故障やハプニングにより、通信ができなくなったり、エンジンが止まったりして宇宙のチリになる危機を乗り越えての帰還でした。世界で初めて小惑星のサンプルを持ち帰ることに成功しましたが、着地のトラブルで、持ち帰ったのはごくわずかな微粒子だけでした。そして、初代はやぶさは大気圏で燃え尽きました。

この反省から、「はやぶさ2」では、再びプロジェクトを立ち上げ、600人もの人たちが専門分野ごとに研究をして、チームワークによってプログラムの確認を行いました。初代「はやぶさ」の経験があったからこそ、「はやぶさ2」の偉業があったのだと思います。試行錯誤を繰り返しながらくじけないで、我慢強く挑戦し続けた結果、生まれた成功なのです。

皆さんは、この6年間、教科の学習以外に様々な活動を行ってきました。これからは、自ら課題を見つけ主体的に行う学習が一層大切になってきます。この「はやぶさプロジェクト」の人々のように、チャレンジ精神を忘れず、常に「学び続ける姿勢」を持ち続けて欲しいと思います。